

◎過激派とアナキストを単純に直結させるという図式はいまお生きており、しかも洋の東西いずこも同じである。先頃のオランダ・ハーグ事件に関しフランスTV放送は、赤軍とアナキストを同一視して報道したということがある。これに対し、私たちのフランスの友人は放送局へ抗議文を送った。私たちはフランスの仲間の友情に感謝の意を伝えたがこの日本でも最近同じような報道が見られた。これらいずれの場合も報道の無知偏見によるものといえるかも知れないが、そこにはフレーム・アップに通ずる危険が内在しているのである。

精依頼から印刷・発行まで、ずい分時間がかかったけれど、いうならばこのイオム7号はほくたち仲間内の自給自足の作品です。存分にご批判いただき、ハイオムV誌と摩耶プリントを共に未永くご支援ください。◎印刷を摩耶プリントですることにあって、レイアウトも校正もすべて摩耶プリントに任せっきり、ほくはただ原稿依頼をするだけ。受取った原稿も右手から左手へとわたし、ロクに目を通していかない。こんな楽な編集者は他にはいないだろう。その代償として「あとがき」を書く段になってあわてている。

かえており(ホント)きびしく督促されそうで、このところイヤな予感におのっている。◎11・9相沢尙夫講演会の記録を緊急特集として大增頁した。アナキズムの組織問題は、全世界のアナキストの課題である。ほくたちはこの問題に対し理論と実践の両面から同時に取組まねばならない。今回の講演会はその表れの一つである。(前)◎本号の合評会報告中には、同人の日野善太郎が病臥中とあるが、11月9日の講演会には顔を見せて愛用のカメラでバチリバチリやっていた。まずは安心というところをお伝えしておく。◎編集の手ちがいにあって、平山房子さんの原稿が枠組がらハミ出し、また小部分ながら一部文章を改変しなければならなかったことをフサコさん及び読者諸彦にお詫びする。(戸)

記録／11・9相沢尙夫講演会

日本無政府共産党／一九三〇年代における

アナキズム革命の試行

講演／相沢尙夫 〓 実行委編

内容をより広く公開することが適切であると考え、以下に掲げるものである。

▲はじめに▼——実行委  
去る一月九日大阪において『日本無政府共産党』海  
燕書房刊)の著者相沢尙夫氏をむかえての講演会がひら  
かれ、相沢氏は一時間半にわたって「無政府共産党」を  
主題とする講演をおこなった。その内容は、同党の成立  
に関する歴史的・運動史的背景の解明を前提としつつ、  
主要には同党のぶつかった理論的諸問題が述べられてい  
る。そのいくつかは四〇年の歳月をこえて、今日もなお  
未解決の課題として私たちの前にあり、私たちは無政府  
共産党の理論的模索をふりかえることによつて、その課  
題をさらにみずから引きつけ、今日の状況の中で解答  
を見出していくためのバネたり得ると思うのである。

本講演会の運営にあたった実行委は、このような確認  
のもとに、当夜会場に参集された諸君のみではなく講演

表題ならびに中見出しは実行委で付けたもの、(……)  
内の文章は、相沢氏より寄せられた手紙による補足であ  
る。なお、出来得るかぎり忠実に採録するよう努力した  
が、もし不手際があるとすれば、その責任はすべて実行  
委にある。さらに、最初の予定では実行委が講演会場で  
配布したレジュメをさらに検討・深化させて再録するは  
ずであったが、それよりも相沢氏の講演そのものに頁を  
割くことが第一であると考え、同レジュメは割愛した。  
私たちの意図を諒とされた相沢尙夫氏に感謝したい。  
また貴重な誌面を提供してくださった『イオム』編集部  
にお礼を申しあげる。

## 日本無政府共産党／一九三〇年代における アナキズム革命の試行

相沢でございます。私、無政府共産党について話をしないかと依頼をうけまして、うかうかと承知してしまつたのですが、そのあと何を話したらいいのか、昔の思い出話ばかりではしようがないし、それに現在の皆さん若い方々の運動について知らなさすぎると途惑つたのですが、出来るだけやってみようと、やってみりました。お聞き苦しいところもあるうかと思いますが、ご勘弁願います。

さて、アナキズム運動史その他を読んでみても、無政府共産党というのがあつたというそれだけで、内容については語られていない。あるいはアナキズムから逸脱しているのではないかという批判が多かつた。もちろんそういうした批判は自由です、私も無政府共産党が古典的アナキズムそのままであつたとは考えていないので、それはそれでいいのですが……。ともかく一緒に無政府共産党を創つた人達が残らず死んでしまひ、私一人が恋々と生きてゐる。当時、ファシズムのさかんになりだした時代に、彼らにはとにかく情熱を傾けて革命をやるうという意志だけは確かであつた。彼らが何を考え、何をやつたかという事があまりにも知られていない。それがある

程度はつきりさせたいと思つて、『日本無政府共産党』という本を作つたわけです。これには、いろんな人たちの協力によって発見出来た、当時の党テーゼや、党発行のパンフを載せることが可能となりました。

### —一九三〇年代の状況

さて、無政府共産党といつても、もう四〇年あまり前のことで、皆さんご存知ない方もいられるかと思ひます。それで無政府共産党がどうして生れたかを話す前に、一応当時の状況を説明しておきましょう。

三〇年代のアナキズム運動は、二三（大正一一）年關東大震災直後の大杉栄らの虐殺頃から考えないと理解出来ないと思ひます。大杉の死後、その報復として軍司令官福田に対する和田久太郎のテロや、古田大次郎・中浜鉄らのギロチン社による摂政官——現在の天皇——に対するテロ計画などがあり、アナキズムはテロリズムに近いような印象を与えてしまつた。もっともアナキズムが日本に入つてきた幸徳秋水の時代にはまず大逆事件があつたという事情もあるうかと思ひます。しかし計画はあつただろうが、実際に支配階級に対しテロをやつたのは、和田一人だけで、こうした悪印象を与えたのは何といつても支配階級の策謀だつたといわざるを得ません。

ところで、和田が福田を狙撃した二四年には、ソ連ではレーニンが死にスターリンとトロツキーとの闘争が始まつている。翌二五年、日本では治安維持法が作られる。

これはアナキストというより日本共産党への弾圧を目標としたものです。

こうした中で昭和に入ります。支配階級は中国侵略をおしすすめ、ファシシヨ的傾向が強くなつてくる。共産党は既にスターリン主義の時代に入つてゐる。コミンテルンが活動し、「労働者の祖国はソ連である」というスローガンが共産党の機関紙で常にいわれておつた時代です。社会主義に関心のある人達の間には、「革命運動は共産党のみが為し得る」「共産党のみが正しい」という神話が広まつたのがこの時代で、それがはつきりしてくるのが3・15事件以後です。日本共産党こそ社会革命の指導部であり、日共の指導なしには社会革命は行ない得ないという神話です。既にトロツキーは失脚し、スターリンの制覇が成つた時代ですから、それは同時に、スターリン主義が革命を為す主体である、という観念が社会主義者を把えることになる。

### —純正アナキズムとアナルコ・サンジカリズム

一方アナキズムは明治・大正以来直接行動を唱えておりましたが普通選挙が行なわれるようになり、選挙で多数党を取れば労働者の利益が守れる、という幻想が広がる中で、そうではなく、選挙はまやかしてあり、直接行動こそ正しいと主張するサンジカリズムは労働運動の中で急速に沈滞していきます。こういう動きが二八年位から強くなつてくる。

ところで、アナキストとしては選挙による政治運動に反対の態度を明確にしなければなりません。二五年、農民労働党の結成大会へ押しかけて会場を乗取ろうとしたがうまくいかず、そこで、個々バラバラにやつていた人では良くない、連絡機関を作ろう、ということとで結成されたのが八黒色青年連盟（黒連）です。労働運動の分野ではその翌年自由連合派が全国組織として八全国労働組合自由連合会（全国自連）を作ります。これで衰退しかかつておつたアナキズムを盛りかえそうとする動きが始まつたわけです。

しかし、サンジカリズムの問題をめぐつて、いわゆる純正アナキズムとアナルコ・サンジカリズムの対立が激化して来る。純正アナキズムの代表的理論家は八田舟三で、彼の思想が黒連の若いアナキストに強い影響を与えていた。彼はマルクスの階級闘争説・労働価値説の批判をしたのですが、マルクスを批判するのはいいけれど、それとサンジカリズムを一緒くたにしてしまつた。サンジカリズム即マルクス主義のようない方をして、その排撃に力を貸したために労働組合自体が分裂するといふ事態を引起してしまつた。

それでは八太さんはどうやつて社会革命をやるかといふと、一揆暴動を起こそうといふのです。それだけです。権力を倒してしまえば人々は無政府共産の社会を作りあげるんだといふ考えなんです。これはクロボトキンにいたるまである程度共通した考え方ではないかと思

うんです。なるほど抽象的には、権力を倒し権力思想を一掃してしまえば、そうなるでしょう。しかし具体的にはどうなのか。

#### ——クロボトキンの問題

クロボトキンは『パンの略取』の中で、革命が起こればすぐに食料・衣料等が不足してくるだろう、しかし人はこれに共同で対処し、そして能力に応じて働き必要に応じて受取るようになるだろう、と述べている。こうしたことがすぐに実現するかのよう書いてあり、ここでは資本主義から無政府共産の社会へ移る時期の問題が論じられていない。しかし実際には、人々が共同で決定し運営することに對し共産党の、あるいはかくかくの委員会の承認が必要だと主張する者が出てくるでしょう。これはロシア革命であったことです。クロボトキンは、権力的な考えを持った人々を説得し共同の決定に従わせることが出来ると考え、こうした人達がいまいかのよう話を進めている。もともと『パンの略取』はロシア革命前に書かれたものであり、こうすれば無政府になるだろうということ、そこへいたる中間過程を省いてるとも考えられますが。

「『パン略』は、三〇年代のアナキストにとっては最も注目されたものですし、岩佐（作太郎）老人などは、ほとんど『パン略』の祖述者という感がありました。岩佐老人の当時の運動における位置がいかに強かったかは

当時の人達にしかわからないかも知れませんが。この『パン略』はご存知のように、革命に際して人民がおこなうのは入収用Vという活動であり、クロボトキン自身は、収用が徹底的であればあるほど人民の革命になると信じていたと思います。その通りだと思っております。収用を強行することはアナキズム革命にちがいないのですが、収用した生産手段や工場をいかに管理し運営するか、という問題が直ちに起こります。これからが八過渡期Vの問題となるのですが、クロボトキンはそれをきわめて図式的に、人民の自主管理を行ないさえすればいいと主張します。権力や政府を信頼している人々がいかにか多いかを、それに対する対策を欠落させているのです。」

権力を倒せば全ての人は変るんだ、というこうした考え方を当時私達は啓蒙主義だと考えた。それではとうてい共産党の強い力に対抗できない。ロシア革命の二の舞になるのではないかと考えたのです。

#### ——八農村青年社Vの運動

また当時、「アナキズムはつまる処敗北の思想だ」といったアナキストがいた。私これに非常に憤慨したんですが、いう所は一利ある。「支配階級を倒すというのは、それを圧制することだ。アナキズムには圧制の思想は無いはずだ」。それではどうするのかという結論づけて、「アナキズムは敗北だ。敗北でいいんだ」。その論理はよくわかるのですが、私は、「革命は抑圧ではないのか。

それを抑圧なしでやろうとするのは啓蒙主義だ。これでは百年河清をまつというものだ」と当時考えた。八過渡期V——資本主義と無政府共産社会の間によこたわる時期をこう呼んでも構わないんじゃないかと思って使ったんですが——この八過渡期Vの問題は『パン略』からは引かせない。しかしこれを引出さないかぎり啓蒙主義に陥るか、テロリズムに走るしかないと考えた。

さて純正アナキズムの中で、八太さんの考え方を具体的にやろう。ただし八太さんのように大衆から離れてアナキストだけで運動するのではなく、大衆の中で一挙に自由コミュニティを作ろう、と考えた人達がいます。八農村青年社Vの人達です。当時農村は非常に疲弊していた。農民は税金と小作料に苦しめられていた。特に長野県では自作農が多かったようで、税金の問題ですれば村全体がすぐ結束する。これを一挙に自由コミュニティに持っていこうとした。農青の諸君は、「組織は大きくなるほど、組織全体の機関が必要になってくる。それが指導部に転化し、そこから権力が生れてくる。だから組織を持つてはいけない。もし作るとすれば、中央集権的にならない網の目状の組織（無組織の組織）でなければならぬ」という思想に立っていた。網の目状の組織というのは中央がないんですから、各地が直接に連絡をとる。これを村を単位とした自由コミュニティで実現しようとした。これは、純正アナキズムをつき進めれば当然そこに至るわけで、そこから八黒連Vも八自連Vも解体してし

まえという主張が出てくる。これに對し、「なるほど農青のいうとおりだろうが、諸君も東京でやっているではないか。網の目状の組織にしても、結局どこかで全体を見る必要が起ってくるだろう。中央集権ではない、一つの連絡機関が必要となるだろう」と自連の人達が考えるようになった。こままでくると、将来社会の基礎をサンジカとし、その間で生産を調整する調整機関の必要を認めるサンジカリズムの主張に近づきます。

#### ——八自連Vの再建

もともと自連は純正アナキズムに影響されておりましてので、「階級闘争」というのは一つの階級が他の階級と交替するにすぎない」として階級闘争を否定する。当然労働組合運動に消極的になり、さらには労働組合なんかやめてしまえということになり、大衆から遊離してしまふ。これへの反省が自連の内部からも湧いてきた。農青が組織全体を否定する観点から、自連までやめてしまえということになりますと、これではいかん、自連をもう一度建て直そう、という気運が起ってくるのはこれまた当然のことでしょう。そこで何年かぶりで大会をひらき、新しい方針を建てようということになった。これは労働運動全体が非常に右翼化し、日共系の組合は非合法法になっておりましたので、沈滞した労働運動を建て直そうということでもありました。

とにかく自連は、労働組合であるにもかかわらず、ア



ナキストの一種の仲良しクラブみたいになっていて気の合う者だけが集まってくるという状況だった。これでは労働組合ではない。組合であるならば、八太さんが何といおうと労働者の要求にそって戦っていかなければならぬ。労働者の信頼を得られないで何が革命運動だ、というわけです。すると「労働者の解放は自由連合主義を基調とする」という極めて高度のスローガンだけでは労働者はついて来ない。やはり賃金値上げ・クビ切り反対といった日常的要求をかかけて戦わなければだめだ。まず初歩的な処から出直そうということになった。

#### ——アナキストの戦闘的組織への模索

一方サンジカリストの方は日本労働組合自由連合協議会（自協）と書いていましたが、たしかにそれをやってあった。各所で争議をやっている。とにかく日常闘争を自協はやっておいたんですが、どうもうまく行かない。これは自分達の力が弱いからだ、とその都度自己批判してたんですが……まあ今から考えますと、やはり時代ですね。ファッショの時代ですから。だからあの人達に力がなかったというだけではないと思います。だが、やはり何か足りなかった。何かそこに中核となって動くものがないと、結局改良主義的な運動になってしまふ。これはサンジカリズム運動は発展しないではないか、という考えが自協の中にも生れて来ている。

自連では初歩から出直そうという気運です。この自連

を、労働者の日常要求だけを掲げた労働組合にしてしまると、改良主義的な他の組合と同じになってくる。何かそこにアナキストの組織があるのでないか。というのは思想信条の自由を掲げますと、そこに共産党員も入って来れば社民もファシストも入ってくる。アナキストもその中で強い組織を持つていなければ対抗出来ないだろう。中核となるアナキスト組織の必要性が考えられはじめたわけです。

「アナキズムとアナルコ・サンジカリズムの問題について。」

アナキストの中には①労働組合とか階級闘争に反対した人がいました。八太舟三・岩佐作太郎等です。②労働組合・日常闘争・階級闘争には反対ではないが、サンジカリズムの主張——組合員は自己の思想信条を組合に持ちこんではならない——では反アナキズム・反自由連合の者をも自由に加えることになるので（共産党の策謀に乗せられることが実際にあった）、組合も明確にアナキズムを掲げるべきだと主張する人々がいました。自連の運営には③の人達が多くなり、④の人達もサンジカリズム反対という点で⑤に同調するようになり、八太説に賛成する人達が多くなっていったのです。純正アナキズムと呼ばれた人達は⑥も⑦も含んでいたのですから、これを一刮的に非難するのは当を得ていないと思うのです。

一方、アナルコ・サンジカリストと称していた人達の中には⑧の見解に反対という人々と、アミアン綱領に忠

実な人々がいたのです。このアナルコ・サンジカリズムにも多くの問題があるのに、それが出てこないのはおかしいと思っています。」

#### ——レーニン『国家と革命』へのアプローチ

労働組合の内部などで共産党と理論闘争をやると、運動の方針、戦略戦術の問題がどうしても出て来る。アナキストは個人の自由とか無政府共産の理想社会については非常に多く書いているが、では現在何をしていくか、どういう方針で闘えばそこへ到達するのか、という戦略戦術を論じたものは一つもなかった。まあ八太さんのように一揆暴動を起こせ、というのはありますが、コトバは簡単ですが、そんなこと出来っこありません。

これでは、いくらアナキズムが正しいとしても、結局沈滞していくのは当然じゃないか。こうした問題にぶつかっていたのが三〇年代の、無政府共産党が出てくる前の状況です。

そこでどういふ問題を検討したらよいかということ、私が一番興味を持ったのがレーニンの『国家と革命』です。これを読みながら、一面においてはスターリン主義のソビエトの現状にはどうしても賛成出来なかった。結局ああいう結果に陥るといふのは、どこかに欠陥があるにちがいない。『国家と革命』の大部分は私首肯できないけれども、ある一点に来るとどうしてこれが今のような国家になったのかという疑問にぶつかると。当時のスタ

ーリンは、権力を強化し、軍備を強化して世界一の強国にならぬといけないうっていった。これは弁証法かも知れない。強化し強化していけばそれは反対物に転化するという弁証法の論理は貫いているかもしれない。だけどこんなのは見せかけの弁証法だ。だからスターリンはスターリン憲法で一、二年先に共産主義を実現するといっただんですが、そこで共産主義でも国家は必要であるといっけ加えているわけです。これはどこかに間違いがある。

それでくりかえし『国家と革命』を読んだのです。レーニンは——すくなくともあれを書いた一〇月革命以前は——パリ・コミューンを模範としてロシア革命を考えていた。そしてパリ・コミューンは国家とはいえない、死滅しつつある国家であるから半国家だと書いている。ここにカギがあるんじゃないか。またエンゲルスはパリ・コミューンについて、ゲマインシャフトという古いドイツのコトバを発見した、といかにもうれしそうに『住宅問題』か何かに書いている、ゲマインシャフトというドイツ語があるじゃないか、これこそパリ・コミューンだ。ですから彼らもこれを本当の国家とは考えなかった。ところが出来あがったものは本当の、それも世界一統制された国家だ。ここに問題がある。

まあこれは……古典的アナキズムからすると、「おまえはレーニン主義を勉強してどこへ行くつもりなんだ」といわれるかもしれないけれど、とにかく当時私はここから無政府共産党の理論化を始めたのです。これは極め

て不備な、未熟なものに終わっています。

スターリン主義的に権力が極度に集中し、管理が極度に行われる社会となると、人間が主体性を失ってしまうのは当然のことです。ロボットにしてしまえば一番いいので、これくらい統制の利くものはない。人間というのはそこにはない。社会主義が生れたというのは、人間に反逆の思想があるからです。とすると人間が消滅してしまうような国家を作るといのが、どこで始まったのか。

「マルクス・レーニン主義の本質は、プロレタリア権力が死滅するという命題のうちにあります。権力の消滅のための、経済状況、経済組織の変化は、最も力強く作用すると思います。必要のための生産・賃労働の廃止・生産手段の共有（国有ではありません）等々の実現が進行しなければなりません。しかしこの場合でも、平等は実現していません。強制手段は残っているでしょう。日本無政府共産党の主張は、スターリンの国家権力の最強度の強化・集中が、死滅の道だという主張に反対してたてられたものです。あくまでも人民個々の自主性の確立が、権力廃棄のための闘争であると主張したのでした。

この問題は、今後なお検討する必要があると共に、アナキズムの経済学が樹立される必要があると思います。皆さん青年の方々に期待するのです。」

正直いいますと、今でもわからない。もし今までの私の話に興味をお持ちなら、この結論は皆さんの力で解決していただきたいと思えます。

「サンジカリズムでは、革命社会において、△サンジカ▽すなわち組合が管理・運営にあたるとします。そして下からの要求、必要の調整機関が、地方から中央へと作られていく。それは一種の無政府共産主義を予想していると思うのです。機関には、これにあたる専従者が必要になります。この専従者についてはバリ・コミューンが一つの方法を発見しました。レーニンは『国家と革命』でそれを述べています。それには我々も反対ではありません、私というべきかもしれません。私は、交替制をとること、全ての人が調整機関にたずさわることが官僚化を防ぐと信じます。そして原則としては下から上へであって、上から下へではありません。この原則が権力の発生を防止する方法だと思えます。

ここまではこれでいいのでしょうか、問題は次の点です。人民の自主管理の問題です。人民自身の問題です。人民の直接民主主義が、権力者を生むこともあり得るといふ難題です。グオーリンは人民が決定したのなら、アナキストはこれに反対であっても従い、ただ説得をやめないことだといっていると思います。というのは人民は必ずしもアナキストではありません。私がクロボトキンに全面的には賛成しなかったのは、この樂觀的希望的な見解の故でした。人民は長い権力による社会の運営に慣

#### ——反国家の鍵——全人民の武装

△過渡期▽では確かに、我々は権力は持たないといつてみても、反対するものは抑圧しなきゃならない。この抑圧さえ否定すると、さきほど申した通り、アナキズムは敗北の思想になる。この矛盾です。これをどう解決したいのか。これを私は、もうアナキズムに探したんではなくて、『国家と革命』の中に探したんです。するとレーニンはちゃんと書いてる、反革命を抑圧するには何も国家なんかいらんないんだ、全人民の武装が、反革命なんかあっさりやっつけちゃうと。なぜこう書きながら国家を作ったんだということになると、これはレーニンの権力意志以外にないんじゃないか、私は当時そう考えたんですが、この処は現在では未熟だったと思っています。意志だけが決定するとしたのは弱点だった。全人民の武装が反革命を粉砕できる。ソ連ではそれが不可能だったから、国家になったんだ、こういう弁解があるでしょう。しかし赤衛軍にしたということは、人民から武器を取りあげたということです。軍隊だけが武器を持ったということです。これではいけない、全人民が武装しなければいけない。といえますと、これはアナキストにいわせれば、「おまえは権力を持つとうとして、権力者だ」という非難をあげられるとは予想しました。予想はしたが、「全体が権力を持つ」ということは、全体が権力がないということだ」と考えた。では△全人民の武装▽は、具体的にはどうなるのかというのと、わからない。

れているのです。権力を必要悪と考えている人も多くいてしょう。権力獲得を求めている人もいない筈はありません、マルクス主義者のように。ファシストのように。この状況の中で、人民の決定とアナキズムを一致させるのは、広汎なアナキズムの宣伝以外にはあり得ないのではないのでしょうか。そして広汎なアナキズムの宣伝を可能にするには人民のあらゆる組織、あらゆる集会におけるアナキストの優位を確保しなければ不可能です。既成の権力を打倒する者はアナキストであって、共産党であってはならないのです。力によって権力を打倒するのですから、打倒した者は人民の名による抑圧者となります。これが無政府共産党の主張でした。

ここからアナキストの間に非暴力説が生れることは認められます。暴力が物理的力の行使であるなら私も非暴力でありたいと思います。暴力を行使しないためには、全人民の武装のみがそれを可能にするのではないのでしょうか。」

#### △綱領▽の作成

さてそこで、事実について話さなければならぬのですが、もう時間がありません。それで、ごくわずか……無政府共産党は最初は△日本無政府共産主義者連盟▽という名称で……うちあけますと、「ひとつ革命団体を作ろう。その場合簡単につかまらないように全員が武装しよう」、それくらいからはじめた。それで各自分担し



ようというんな部を作りましたが、各部責任者が一人いるだけで後はだれもいない。名ばかりの、何だか子供の遊びみたいだなんて笑ったんだけど、しかし大真面目なんです。

これではしようがないから、人を増やそうと相談したが、それも出来ない。というのはまだ綱領も何も決っていないんですから。ただ暗黙のうちに無政府主義革命をやらんだけなんです。そこでまず綱領を決めよう、おれ達はこうやるんだということだけは決めておこう、ということでも綱領と行動綱領が出来た。八カ条の、あたり前の——もちろんあたり前でないとおかしいんです。——当時のアナキストなら反対する者のない綱領です。ただ一つだけ注意しておきたいのは、綱領の第一に「権力政治及び資本制の廃止」とありますが、普通アナキストでしたら、ここに「政治」というコトバは入れません。わざわざ「権力政治」とした。これはいわゆる選挙とかではないが、政治運動を否定しないということ。経済問題ばかりではなく、そこから派生する社会的制約に対する闘争はやるんだ、という意味でした。これを主張したのは二見敏雄です。私は反対したけれど、結局多数決で敗れた。私今でもこのコトバ気に入らないが、ではどんな別のいい方があるんだといわれると困るんで、やはり「権力政治」の方がいいのかなとも思ったりします。途中で時間がなくなってしまいましたので、どうも非常（拍手）にヘタな話でお聞き苦しかったです。（拍手）

（講演の後、質疑応答が行なわれた。以下はその一部である）

司会者 若干の質疑応答を行ないたいと思います。自由にどうぞ。

質問者Ⅰ 無政府共産党が中央集権型の組織であったということについて。党中央と党員、あるいは党と大衆の関係を、当時どのように考えておられたのですか？

相沢 中央集権組織を提案したのが二見で、植村諦は強く反対した。これは連盟の頃ですが、連盟というのは非合法活動もやる組織であることを前提としておりましたから、あまり全部のことを全部の人に話すというわけにはいかないだろう。そこで中央集権組織が出てくる。そして討論の中で、自分達のグループだけはそれでいいけれど、他の労働組合とか、別のグループにまで中央集権組織を広げないということになった。他の団体を連盟なり党なりが命令で動かすなんてことは否定されていたわけです。

それで、連盟あるいは党だけは種々の非合法活動をやる場合があるから、誰かがどこかで知っていなければならぬ。合法方面の活動がありそれに対応した非合法活動が——たとえば労働争議が激化してゼネストになってくる、では武力でもって工場を占拠する、あるいは破壊するという活動が起こるかもしれない。しかしそれは誰かが知っていなければ出来ないという観点から、その知

っている人が中央部だという考え方。合法活動と非合法活動の接点にいるのが中央部という考え方でした。これはまあ非常に問題が出てくるとは思いますがね。

それからもう一つ、これは非人間的だといわれるかもしれないませんが、あることを一緒に決めた以上、それは必ず実行するんだ、どんなにイヤなことでも実行するんだ、そういう人間でなければ党へ入れるのはやめておこうと申し合わせました。それで家庭をもっている人、子供のいる人は排除しよう。排除というのは入れと進めないといいことです。

質問者Ⅱ もう一つ。お話の中でレーニンの『国家と革命』に関して、後のスターリニズムの発生をレーニン個人の権力的な資質だけに限ったのは未熟だったと、そうおっしゃいましたが、現在のお考えを。

相沢 レーニンの思想の中からスターリンが出たと考えてますね。  
つまり、過渡期には国家が必要だという。ある処では半国家だといながら、別の処では国家だといっている。こういう誤りじゃないんですかね、レーニンの誤りの一つは。そこからスターリンが生まれたんじゃないですか。質問者Ⅱ ではかりに、無政府共産党が革命時にインシァティヴを握ったとして、これは想像の話ですけど、その場合にアナキスト側のスターリンが出て来ないかということ。それから、八党Vを名乗ることについて、討論などありましたか、当時。

相沢 八党Vというコトバにそれほど重みを持たせてはいませんでした。これは中央集権であり、独裁権力を持つべきものだという規定もしていません。一種の徒党みたいなもの。バクーニンの「無政府党V」というコトバ、これを探ったにすぎない。ところが理論的にやりだすと、それでは説明出来なくなって、変っちゃったということになりますけれどね。

もう一つの問題、これは地方自治的な自主的な経済建設で防げるんじゃないか。それを守るのが党にすぎないという考え方です。中国でいう自力更生、当時のコトバでいいますと自給自足を建前です。そしてその地方の党組織がそれを防衛するんだという考えです。だから、いつでも敵がいなくなったら、やめちゃうんだ。その敵というのは共産党だった。共産党は全滅させる積りだった。一人残らずとつかまえてしまおうと考えました。あれがいたんじゃないか、ともだめだ、こういうと、あのロシアの裏がえしじゃないかといわれますけれど、裏がえし結構、やつつけてしまえという考えでしたよ。

（笑）まあ憎悪でしたからね、当時は。

質問者Ⅲ 過去のことはいいとして、今回本を出版された、その主なる目的は何でしょうか？

相沢 間違っていたか正しかったかは別問題として、とにかくこういう運動をやっちゃった以上やっぱり運動史の中で明らかにしておかねばならないんじゃないか。間違っていたらこれを批判して、新しくやっていけばいい。

その資料としてというのが主眼でした。

質問者Z もうすこし意地悪く質問させてもらいますが、一つのもがただの、真白な資料としてあり得るとは思えないのですが。

相沢 ええと……ここでもいいですか？ いろいろいきさつはあるのですが、戦後、私アナキスト連盟に入らなかつた。というのは、昔のままの考え方なんです。古いいわゆるクロボトキン主義といいますが、古典的アナキズムといえますか、これには賛成できない。私達が当時批判した、その形が復活した。君達は一九三〇年代の始めのことを又やるのか、ということ。私はそれよりも労働運動をやっていた。それで後で作ったのが自由社会主義同盟です。江口幹が主唱者で、日労会議の中に作った。これは江口の病気で立消えましたが。

質問者M 無政府共産党がいわゆる中央集権的形態を採ったという、それは根本的なものではないと思えますけれど、たとえばその最も悪しきあらわれが、摩耶山事件なんかだろうと思うのですが……。それで僕の経験ですが、かつてベトナム反戦運動のJATRCにすこし関係したのです。目に見えない組織に所属していると僕は自己規定して、まあAならAにニモツを渡した場合、Aがそれをどこへ持っていくか僕は全く知らない。数ヶ月たつとスエーデンにあらわれる。誰かが運んだんだなということになるんです。で、あれは自由連合的な、やはり組織であったと思う、しかもたしかに秘密組織ですね。

これなど、新しい組織方法を探していく参考になると思います。で、相沢さんのご意見をうかがいたいのは、中央集権組織にしたのには、どのような意味があったのか、ということ。相沢 結局、当時の状況を知らないからわからない。会合を開いてこれをやろうと決めるのだが、する人はする、しない人はしない。また、極めて初歩的な、時間を守らないということ。まずこれから改めようじゃないかというのから中央集権となったんで、だから今のMさんのいうような組織なら、これは一人一人が自主的にやれるんですから、命令する必要はない。中央集権なんて必要ない。

「党の問題——これは戦略戦術の問題だと思っております。三〇年代の状況下では秘密組織の党が必要だったと思えますが、まがりなりにもブルジョア民主主義の今日ではまた別の展開が考えられるでしょう。特務機関もこの問題に含まれるのです。」

だから現在の私の考えでは、中央集権など採る必要はすこしもないと思います。司会者 それでは時間になりましたので、これで。ありがとうございました。(拍手)

於／大阪中央公会堂第一会議室

一九七四・一一・九